

<新刊紹介>東喜望著『上田秋成「春雨物語」の研究』

著者	日暮 聖
雑誌名	日本文學誌要
巻	59
ページ	97-97
発行年	1999-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020053

東 喜望著

『上田秋成「春雨物語」の研究』

日 暮 聖

『春雨物語』は謎につつまれている。出版業の隆盛期、コマーシャルイズムの走りとみえる18世紀末から19世紀始めにかけて執筆されたにもかかわらず、一度も刊行されることなく、秋成の自筆稿本と書写本が伝えられるにすぎない。十篇の話は秋成死没の前年によく『春雨物語』としてまとめられたが、それさえも秋成は全面的に改稿している。何が作者をつき動かしていたのか。しかも改稿された『春雨物語』は部分的にしか残っておらず、読者は、改稿前と後の記述の混在した『春雨物語』を前に、最終的な作者の意図に分け入ることのできないものどかしさにかられる。

『春雨物語』はつねに『雨月物語』との比較の中におかれてきた。『雨月』は日

本浪漫派から高く評価された。対して『春雨』は、造形性も希薄で従来の物語観からすれば対極に位置する。いきおい理解者も少ない。見方を変えれば、20世紀の文芸批評の方法を跳ね返すような物語だともいえる。

本書は、「序にかえて」に続き、「春雨物語」「歴史小説」の検討の中で一話目の「血かたびら」を論じ、以下「天津処女」「海賊」「二世の縁」「目ひとつの神」「死首のゑがほ」「捨石丸」「宮木が塚」「歌のほまれ」「樊會」とそれぞれの作品論を収め、『春雨物語』の全作品に言及されている。附論として、懷徳堂、木村兼葭堂、間重富との交流を記した「上田秋成と間重富」が付されている。これらは書き下ろしの二論文を除き、1965年〜70年にかけて精力的に書き継がれたものであり、評価の一定しない『春雨物語』に、歴史小説という視点から切り込もうとするもので、先駆的研究を成している。〈秋成〉といえば、ともすれば「情念」とか「怨念」とかの言葉でからめ取られる傾向にあるが、筆者はいちはやく理知的な秋成像を提示している。例えば次のように

記される。「秋成には都市文明に対する失望がある。(略)だが、注目すべきは、直き心の余りに、野蠻で愚直になることや、賢明すぎて、奸佞になるのを戒めていることである。行き過ぎた知性を批判しながら、人間が人間であることの根源に、理性が存在するの認めていたのが秋成である。」

秋成は、国学に自己のスタンスを定めはしたが、本居宣長のように儒教仏教の外来思想を「さかしら」として退けようとはしない。「理」を追及し続けた。

『ますらを物語』と「死首のゑがほ」の論稿では、『ますらを物語』を従来のように家の対立とか不義密通という視点からとらえるのではなく、母親の存在の重要性を指摘する。母親の「内的論理」の分析は説得力がある。

(ひぐらし まさ・文学部教授)

▽一九九八年五月・法大出版

一九〇〇円

△著者＝一九六五年修士卒